

## 熊本大学学術リポジトリ

### Kumamoto University Repository System

Title	故の平山校長太郎ぬしの三年の御祭にさゝぐる詞：文苑
Author(s)	園，哲雄
Citation	龍南會雜誌， 3 0： 5 9 - 6 0
Issue date	1894-11-03
Type	Departmental Bulletin Paper
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2298/4457">http://hdl.handle.net/2298/4457</a>
Right	

椎田村而休、距中津五里、炎日赫々、步行頗窘、自椎田至小倉八里餘、余有所期、命車而馳、比正午至行橋驛、則馬車已駕而待、同乘二名直發、自是至小倉、行程六里、驅馬數時而達、道布砂石、以故凸凹、每馬駛、上下左右動搖、使人催嘔氣、比達已過四時、直赴停車場、待列車發、汽笛一聲、瞬間數里、薄暮經赤間、至博多、已過八時、投停車場外一亭、

十三日陰、早起傳餐、赴停車場、五時半投汽車、途中雨少降、轉輪猝々、經久留米、大牟田、高瀬諸驛、至池田、午前十時也、自博多至此、道程三十餘里、費時五時而不足、其速真可驚也、

叙景記勝、目命筆應、問者古蹟徵史、或賦詩有韻致、有精采、余嘗遊其境、今讀此篇、山容水態、髣髴在目、轉覺用筆之妙、

明治壬辰十一月

龍巷遯史暴批

## 故の平山校長太郎ぬゝの三年の御祭にさくふる詞

助教 園 哲 雄

あやめふき、早苗とる頃、水鶏の叩く音ぞ、心細からぬかは。といひえ人さへありて、昨日今日の空のけしき、あへなく、たいあらす見えけり。まして、故の校長平山の大人の三年の御祭よ、あんあへる心細さ、ふりしきる雨の水くきよは、得寫し出すべうもあらす。されど、君が情の淺からざりしに。えたへで、いにま一年の御祭には、

乾くまもあらで渡りし一とせは、君をなみたの夢の浮橋

と法のび音に、あきてしことも、ありき。さて又、隙ゆく駒の足早み、三年のあどふ

今日の悲しさは夢の中にも夢を見るこゝろすれ。昔ある人は、しばしのわかれを惜みて、

一日たに見ねはこひしき君の去あは年の四とせをいかてすこさんといひまこともありしかば、いはんや、今日は、

一日たにこひしき君に別れつゝ年の三とせをいかてすきけん。

かきくらす涙に、そぼちつる袖の雫に、文字も、をさゝゝしどけなく、消ぬはてゝ、たゞかりこもの思ひ亂れたるのみにこそ。うもゝゝ明治の御稜威はいよゝゝ教育の光に輝き、學校の榮は、ますゝゝ、五百のをまへ子に滿ちあんとす。うのこゝらのをしへ子たち、うち集ひて、まめやかにけふのみまつり、仕へ奉るさまを、安らけく、きこしめして、この始ある人人の、さながら、終をよくせんことを、天翔りても、見そあはし、守り給へかし。とをしへづかさの、しりへを汚せる園哲雄、謹み額つきて申す。

贈從軍友人

講師 湯原 元一

時事有感

秋月 胤繼

何時快劍斬君讐。八道風雲隻手收。閔族初無經國志。袁奴元有爲身謀。亂餘天地秋。將老劫外江山月。亦愁莫吊英雄征戰跡。倭城下水空流。

隣睦。日東天子怒赫焉。三軍直征海與陸。何  
堂、堂、大陸跨兩極。六大洲中、最廣域、可憐、西  
夷、奪掠餘僅存。日支兩三國、前門有虎、後門  
狼、東洋風雲轉、懷愴、沈思、到此、腸欲斷、須厚  
隣、誼、警非常。愛親、覺羅、何碌碌。乃利、少弱拋